

博士学位論文審査要旨

2021年1月9日

論文題目： 花田清輝・後期歴史小説研究——非暴力主義の探究——

学位申請者： 加藤 大生

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

本論文は、花田清輝の昭和35年以降に執筆した歴史小説を取り上げ、花田の歴史認識の特性を明らかにするとともに、従来の「暴力の歴史」の中で不可視となっていた「非暴力の伝統」を掘り上げようとする花田の非暴力主義の内実を解明したものである。

第Ⅰ部は、武田信虎に注目した小説集『鳥獣戯話』を取り上げ読解したもので、史料を精査した上で丁寧に分析されている。第一章の「群猿図」論では、従来の「暴君」像とは異なり、集団性に執着する信虎の特異な思考に焦点が当てられていることを指摘し、そこに花田の共同制作の理念を見出した。第二章、第三章では、歴史叙述をめぐる問題を中心に「狐草紙」「みみずく大名」二作品を考察した。作品内で偽書を用いてフィクションとドキュメントを対立させている点や、ベンヤミンの思想と通底する「偶然」を契機とする歴史認識を提示している点等から、同時代の実証主義的歴史観やマルクス主義的歴史観を問い直した作品として評価した。

第Ⅱ部では、『小説平家』所収の作品を取り上げている。第四章では、『平家物語』の作者をめぐる推理を語った小説「冠者伝」の意義を、戦後の『平家物語』受容の状況と重ね合わせて明らかにし、第五章では、『平家物語』「剣の巻」を基に「敗北主義の哲学」が展開される中で、暴力の論理とは異なる力の活用術が主人公の身振りから抽出できることを指摘した。

第Ⅲ部は、『室町小説集』所収の作品を取り上げた論になっている。第六章では、注という形式をあえて採用して、エクリチュールが有する政治性を露わにした作品として『吉野葛』注を捉え直した。第七章では、虚構の画家の伝記という体裁を取った小説「画人伝」を精緻に読み解き、同時期の映画論との関わりのもと、非暴力的抵抗の力能を、従来の暴力の歴史を見る主体の認識パラダイムとは異なる形で、花田が知覚しようとしたことを提示した。第八章では、小説「力婦伝」を同時代の地域闘争や住民運動との関連から再評価した意欲的な論となっている。

本論文は、花田清輝の小説を独自の視座から緻密な論理展開で読み解いた好論である。花田の非暴力思想や共同制作の理念が、どのような形で実践され社会と切り結んだのかについては更に踏み込んだ分析が期待されるところだが、しかし論文全体として新見が多く水準が高いものとなっている。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2021年1月9日

論文題目： 花田清輝・後期歴史小説研究——非暴力主義の探究——

学位申請者： 加藤 大生

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 西川 貴子

副査： 文学研究科 教授 田中 励儀

副査： 文学部 教授 瀬崎 圭二

要 旨：

上記審査委員3名は、2021年1月6日午後6時30分から約2時間にわたり、徳照館第二共同利用室において、公開で学位申請者に対して、口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、的確かつ詳細な応答を行った。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、外国語（英語）については、口頭試問にひきつづき本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、十分な学力のあることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 花田清輝・後期歴史小説研究——非暴力主義の探究——

氏名： 加藤 大生

要旨：

本論文は、花田清輝が昭和35年以降に執筆した、一連の歴史小説を論じるものである。特に、そこにおいて表現された非暴力主義の問題に焦点を当てる。

花田清輝は、戦後復興期における文学運動・芸術運動の主要な担い手の一人であり、戦後文壇のみならず、絵画や映画などを含むさまざまな芸術領域に少なからぬ影響を与えた存在として知られる。批評家としての活動を主としていた花田であるが、同時に彼は、日本の歴史に材を採った小説群の執筆にも力を傾注した。本論文では、花田における歴史小説の創作に着目し、個々の作品の具体的な読解を通じて、作家の思想的な内実とその可能性について検討した。

従来の研究史では、戦後から昭和35年頃までの花田の批評活動に、主に着目がなされてきた。一方で、昭和35年以降、死の直前まで書き継がれた歴史小説群について詳細に論じたものは、管見の限りほとんど見当たらない。しかし、花田がそのキャリアの後期に重点的に取り組んだ歴史小説の創作は、作家の思想的営為について考えるうえで、無視することができない重要な試みである。

花田の歴史小説における重要なテーマの一つが、「非暴力の伝統」の探究である。本論文では、特にこのテーマに着目する。一連の歴史小説の創作を通じて、花田は自身の非暴力思想を練り上げていった。これまで、花田の述べる非暴力主義とは、言葉やレトリックを武器に闘争する知識人の姿勢を表現したものとして解釈される傾向が強かった。しかし、花田の考える非暴力は、そのような形象のみにとどまるようなものではない。たとえば、デモやストライキなど、集団的な運動として生起する非暴力的積極行動にもまた、花田は極めて重要な意義を看取している。現況を変革するための革命的な行動へと人びとを駆り立てるような、潜在的な力の水準を触知することが、花田の非暴力主義においては企図されているということを指摘した。

花田が「非暴力の伝統」を問う際、重要なのは、それが同時に既成の歴史認識の批判的な検討にもなっている、ということである。暴力同士の闘争によって規定された歴史を解体し、そこにおいては不可視化されている「非暴力の伝統」を抽出するための戦略が、花田の歴史小説では問われている。したがって、本論文の分析は、花田の非暴力主義の内実を詳らかにすることだけを目的とするのではない。花田における歴史認識・歴史叙述の分析も、同時並行的に展開していく。特に同時代の〈実証主義的歴史学〉／〈マルクス主義的歴史学〉に対する批判意識を作品から浮かび上がらせることにより、花田の小説がもつ歴史認識・歴史叙述の特性についても論及した。

具体的な対象として、本論文では、『鳥獣戯話』（昭37・2・25、講談社）、『小説平家』（昭42・5・10、講談社）、『室町小説集』（昭48・11・8、講談社）の三つの小説集を取り上げ、そこに収められた諸作品の精読をおこなった。

分析に際しては、三部八章構成をとる。第I部では、花田が戦後になって初めて発表した小説集である『鳥獣戯話』を検討した。

第一章では、「群猿図」（『群像』昭35・6）を取り上げる。武田信玄の父、信虎の半生に取材した本作は、信玄による信虎追放事件をめぐる解釈の歴史を辿りながら、この人物の特異性を独自の仕方で浮かび上がらせる。猿の群れに執着する信虎の思考とともに描き出される集団性のさまざまなタイプについて、この時期の花田の論争などにも目を向けつつ、分析した。そのうえで、

俳諧連歌において表現される集団性のありようを、花田の目指す共同制作の理念と重ね合わせながら考察した。

第二章では、「狐草紙」(『群像』昭36・6)を取り上げ、この作品が提示する歴史観の内実について論じた。「良質の史料」を重視する同時代の歴史学の言説を批判的に引用しつつ、「目撃者の証言」を称揚する本作の歴史観は、小説内に描かれる「狐」の形象に注目することで、より具体的なかたちで意味づけることができる。文字史料に対する花田の考え方や、彼の提唱する芸術論・リアリズム論を補助線としつつ、作品の読解を試みた。そのうえで、既存の〈マルクス主義的歴史学〉が問い直される時代状況のなかで、それとは異なる〈偶然〉を契機とする歴史認識の回路を示したものとして、この作品を価値づけた。

第三章では、「みみずく大名」(『群像』昭37・1)について検討した。ここでは、作品から読み取ることのできる史料批判の姿勢を、「ドキュメント」と「フィクション」を対立させる花田の認識を援用しながら整理した。加えて、カルモナという虚構の人物の形象について分析し、そのような「観察」者が設定されていることの意義を明らかにした。そのうえで、信虎の晩年における身振りが、過剰な暴力性によって暴力自体の内破を企てる、特異な暴力批判となっていることを指摘した。

続けて、第Ⅱ部では、『小説平家』に所収の諸作品を取り上げる。とりわけ、①『平家物語』という一種の歴史叙述を対象に据えることの意味、および、②暴力による支配に抵抗する実践の分析、という視座から、ここでは二つの作品を分析対象として選定した。

第四章では、特に①の視座から、「冠者伝」(『展望』昭40・12)を取り上げ、『平家物語』の作者について考証的推理を展開する本作の批評性を論じた。戦後の『平家物語』をめぐる言説空間のなかで本作を読むことによって、「冠者伝」が提出する作者主体の具体的なありようを明らかにした。同時に、「国民文学」や「大衆文学」をめぐる同時代の問題系のなかで、作者の位置を問い直すことの意味についても論じた。

第五章では、②の視座から、「大秘事」(『世界』昭41・10)を取り上げ、特に作中に描き出された「敗北主義の哲学」に焦点を当てて考察した。この小説は、『平家物語』の「大秘事」とされる「剣の巻」を手がかりに、暴力中心の歴史認識が形成されていくありようを辿りながら、そこに別の歴史を重ね書きしていく。剣振丸や後鳥羽院、老松といった登場人物たちの形象を具体的に検証することで、暴力による支配の現実のただなかで、それぞれがどのような身振りを選び取っているのかを分析した。そのうえで、剣振丸による「敗北主義」の実践を、暴力／対抗暴力の循環構造に内在しながらも、暴力の論理とは異なる力の活用術を模索する一連の営みとして位置づけた。

さらに、第Ⅲ部では、『室町小説集』に所収の諸作品を取り上げる。ここでは、①室町時代(特に後南朝)を歴史叙述の対象に据えることの意味、②暴力の歴史のなかから非暴力の理念を取り出す方法、③非暴力主義と運動論の結節点、という三点について、とりわけ検討していく。この問題意識のもと、『室町小説集』からは三つの作品を分析対象として選定した。

第六章では、①の視座から、『吉野葛』注(『季刊芸術』昭45・1)を論じる。谷崎潤一郎『吉野葛』(『中央公論』昭6・1～2)に「注」をつけるという本作の身振りについて分析することで、後南朝／吉野という時間／空間を取り上げることの意味を考察した。「史実」と「伝説」が識別不可能になり、単線的な歴史認識のモデルが瓦解するような瞬間を、『吉野葛』注は、文学作品のエクリチュールが有する政治性を強調することによって捉えている。

第七章では、②の視座から、「画人伝」(『群像』昭46・1、原題「室町画人伝」)を取り上げる。本作は、作中に二種類の非暴力が描き込まれているという点で特徴的である。同時代言説と照らし合わせることで見えてくるのは、「画人伝」の非暴力思想が、暴力に抵抗するための潜在的な力の領域を開示しようとするものだということだ。同時に、虚構の画家の伝記を書くという体裁をとる「画人伝」の方法も、そうした非暴力的抵抗の力能を掴み取るという企図との結びつきにお

いて意味づけることができる。暴力の歴史のただなかに非暴力の理念を知覚しようとする本作の戦略について考察した。

第八章では、③の視座から、「力婦伝」(『群像』昭48・8、原題「室町力婦伝」)を取り上げ、同時代的な地域闘争や住民運動とのかかわりを意識しつつ読解した。まず、本作に描かれた小川弘光の形象を分析し、そこに表現された管理権力の具体相を析出した。そのうえで、弘光の統治から逃れ去るものとして、山邨御前の態勢を位置づけた。「主婦」と「力婦」の二重性において特徴づけられる山邨御前の「わわしい女」という表象を起点に、本作は同時代的な運動の問題系と切り結ぶ。「新しい社会運動」が生起する時代のただなかで、運動のダイナミズムに巻き込まれるようにして書かれる本作の批評性を分析した。

上述の作品分析を通して、花田の非暴力主義が有する特性について論じた。また、それがもつ現代的な意義についても言及した。

花田のいう非暴力とは、ただ単に暴力に反対することではない。あるいは、単なる無抵抗主義的な姿勢を打ち出しているのでもない。非暴力をめぐる花田の思考を特徴づけているのは、それがあくまでも暴力の現実を注視し続けるものだということである。非暴力主義の探究は、暴力的なものを性急に排斥するのではなく、むしろ逆説的に、暴力的なものの駆動する現場に徹底して踏みとどまることからはじめられる。花田が「非暴力の伝統」を探究するなかで問うていたのは、ともすれば暴力という形で発露しかねないような潜在的な力を、いかにして暴力的でないやり方で運用するのか、ということであり、いかにしてその力を革命的な方向へと整流するのか、ということだった。

本論文では、一連の歴史小説の読解から以上の議論を展開し、そこで練り上げられた花田の非暴力主義の理路と実践について明らかにした。